



ドイツ車いすフェンシングチーム
シルビー・タウバー 選手

田川市のみなさん、こんにちは！私たちは今、車いすフェンシングの練習中です。東京2020パラリンピック大会に向けて、準備を続けています。田川市では、寄付をしてくださったたくさんの方々のおかげで、素晴らしい合宿施設が完成したと聞いています。ドイツ車いすフェンシングチームを代表して、心から感謝を申し上げます。それでは、2021年8月にまたお会いしましょう！みなさんに会えることを楽しみにしています。どうぞ、お体に気をつけてください。



ドイツ車いすフェンシングチーム
アレクサンダー・ボンダー コーチ

8月に、再会しましょう。 ドイツからのメッセージ



→事前キャンプに向けたドイツとの仮調印式（平成29年）

ドイツ車いすスポーツ連盟
車いすフェンシング部門長

イラ・ツィーグラール さん

(写真中央)

みなさんからの温かい寄付により、素晴らしい合宿施設が完成したことを心から嬉しく思います。車いすフェンシングの選手にとって、最高の事前キャンプの環境を整えてくださったことに感謝いたします。

特集

信じて進む

オリンピック・パラリンピック史上初の「開催延期」。しかし、このまちと人々は、8月の開催を信じ、海外選手を受け入れるホストタウンとして着実に歩みを進めています。



令和元年9月に本市で行われた、ドイツとベラルーシの公開練習の様子。マスク越しに鋭い眼光で狙いを定め、ベラルーシの選手が一撃を放つ。

残り4か月の急転

世界中の人々が注目し、待ち望んだ2020年。56年ぶりに東京オリンピック・パラリンピックが開催されるこの年は、歴史に残る記念すべき年になるはずでした。しかし、新型コロナウイルス感染症という波乱の幕開けとともに、忘れたい1年となりました。今もなお続くコロナ禍は、約1年前から拡大を始め、瞬く間に世界中を飲み込みました。さまざまな国際的なスポーツ大会やイベントが、相次いで延期や中止を決定。このままでは、東京オリンピック・パラリンピックはなくなってしまうのかと、誰もが不安に駆られました。国内外のメディアやSNSなど、さまざまな場所で意見や予測が飛び交う中、IOC（国際オリンピック委員会）は「予定どおり開催」の姿勢を貫きました。一方、3月11日には、WHO（世界保健機関）がパンデミック（世界的大流行）を認定。開催国である日本も感染拡大が続いている状況を受け、各国の競技団体や選手たちから延期や早急な判断を求める声が噴出しました。そして同月24日、IOCのバッハ会長と安倍晋三内閣総理大臣（当時）が電話会談を行い、オリンピック・パラリンピック史上初の「延期」が決定。開催まで、残り4か月のことでした。

1本の電話

東京オリンピック・パラリンピックの延期という急報を受け、翌25日に開いた定例記者会見で、二場公人市長はコメントを発表。「あくまで中止ではなく延期。ドイツとベラルーシの車いすフェンシングチームに、田川市に来てよかったと思ってもらえるよう、しっかりと受け入れ体制を整えます」と方針を示しました。2021年8月の開催という具体的な方向性が示された以上、そこに再び目標を据え直し、前進を続けるほかありません。新たな決意を胸に、市の担当職員は、市役所ロビーにある「大会まであと154日」のカウンターをリセットしました。延期が決まる3日前、ドイツにいるエージントを通じて、市役所に1本の電話が入っていました。相手は、ドイツ車いすスポーツ連盟のイラ・ツィーグラールさん。「パラリンピックが延期されたとしても、田川市は車いすフェンシングチームを受け入れてくれるでしょうか」という質問でした。これに対し、市として「必ず受け入れます。開催を信じて、引き続き準備を進めましょう」と回答。また、練習に励むコーチや選手からも動画やメッセージが届き（上記で紹介）、お互いに絆を再確認しながら、ともに2021年の8月を目指しています。

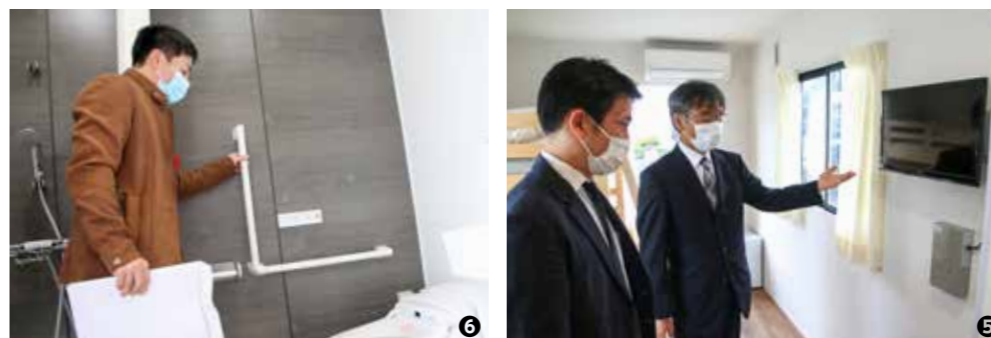
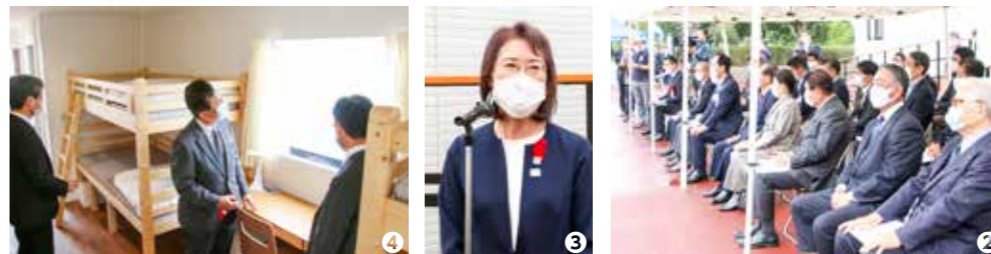
まち歩きでバリアを発見！
バリアフリーマップ作製



まち歩きをして身近なバリアを見つける「バリアフリーマップの作製」を10月に実施しました。田川伊田駅・田川後藤寺駅周辺を中心に、子育て世帯や車いす利用者など一般の参加者16人が調査。また、伊田小学校4年生65人、後藤寺小学校4年生44人が学校周辺の地域を歩き、車いすでの通行を妨げるバリアのほか、障害者に配慮されている場所などを探しました。まち歩きのあとは、調査結果を大きな地図に反映。写真やコメントを貼り付けてバリアの場所などを示し、オリジナルのマップを作製しました。



①合宿施設の完成を記念してテープカット。会場から大きな拍手が送られました②合宿施設整備への寄付者や関係者が列席③祝辞を述べる大曲昭恵福岡県副知事④⑤式典後はトレーラーハウスの内覧会が行われ、市職員が機能や設備などを説明しました⑥トイレの手すりの強度を確認する加納選手⑦笹島選手の胸を借りて突きの練習をする参加者⑧車いすラグビーの模擬試合に臨む堀貴志選手（Fukuoka DANDELION）⑨ポッチャ体験の様子。相手のボールを狙って一球入魂



車いすフェンシング日本代表
加納 慎太郎 選手

田川市が目指す共生社会の実現に向けて、一緒に協力していきたい。開催延期というピンチをチャンスに変え、2021年の東京パラリンピックではメダルが取れるように頑張ります。

まちも人も
万全を期して

合宿施設が完成し、ハード面の整備はほぼ完了。パラスポーツ体験やバリアフリーマップの作製などを通して「心のバリアフリー」の浸透も進んでいます。

合宿施設など、ハード面の整備だけではなく、市民に体験や学びの場を提供し、障害やパラスポーツへの理解を深めてもらうことも大切な準備です。本市は今後もこつとした「心のバリアフリー」を浸透させる取り組みに力を入れていきます。

パラスポーツを身近に
10月24日には、市総合体育館でパラスポーツ体験イベントが開催され、市民など約200人が参加。車いすフェンシングや車いすラグビー、ポッチャなどを体験しました。また、車いすフェンシング日本代表の加納選手と笹島貴明選手、山本迪也コーチが来場し、公開練習を実施。スピード感溢れる迫力のサーベル捌きに、参加者からは驚きと感動の声が上がりました。笹島選手は「車いすフェンシングは相手の技や戦術を読み合う競技。守った後にどう攻めているかなど、動きに注目すると面白い」と解説。車いすフェンシングを体験した荒巻大翔さん（宮前田小5年生）は「サーベルで突かれることが怖いと思っていたけれど、やってみたらすごく楽しかった」と笑顔で話しました。

合宿施設など、ハード面の整備だけではなく、市民に体験や学びの場を提供し、障害やパラスポーツへの理解を深めてもらうことも大切な準備です。本市は今後もこつとした「心のバリアフリー」を浸透させる取り組みに力を入れていきます。

市職員が機能や設備などを説明しました⑥トイレの手すりの強度を確認する加納選手⑦笹島選手の胸を借りて突きの練習をする参加者⑧車いすラグビーの模擬試合に臨む堀貴志選手（Fukuoka DANDELION）⑨ポッチャ体験の様子。相手のボールを狙って一球入魂

合宿施設が完成
本市はこれまで、事前キャンプの合宿施設としてトレーラーハウスの整備に取り組んできました。これに対し、本市に縁がある全国の企業や個人からたくさんの方々が集まり、目標であった15台の整備が実現しました。この施設には、ベッドやトイレ、シャワーユニットなどが備えられており、すべて車いすで利用しやすいように設計されています。また、テレビが視聴できるほか、WiFiの環境も完備。パラリンピックの事前キャンプだけではなく、パラスポーツ大会の誘致や災害時の避難者受け入れなど、今後の幅広い活用が見込まれています。

10月17日には、完成記念式典を実施。寄付者や関係者を前に、二場市長は「田川を愛する多くの

※今号裏表紙で寄付者を紹介しています。



TOKYO 2020

支えたい



福岡県内に移住しているロシアやベラルーシ、ウクライナ出身のみなさんが、ロシア語の通訳ボランティアに協力してくれます。



▲左からナタリアさん、ビクトリアさん、オルガさん、二場市長、イリーナさん、リリアさん、城本会長

海外から選手団を受け入れるにあたり、必ず課題となるのが「言葉の壁」。ドイツに対しては、主にドイツ出身の市国際交流員が通訳を務めます。しかし、ベラルーシの公用語はベラルーシ語とロシア語。一昨年に本市でベラルーシのチームが合宿を実施したとき、英語だけでは十分にコミュニケーションが取れないという課題に直面しました。このことを知った神田商店(大任町)の城本潤(しんぼん)会長が支援を表明。城本会長の呼びかけにより、福岡県内に住んでいる口

シア語圏出身の人たちがキャンプ時の通訳ボランティアに志願してくれました。12月10日には、市総合体育館やトレーラーハウスなどを視察。文化や生活様式の違いを考慮して、ロシア語の表示が必要な場所・設備などを確認しました。言葉や文化など、さまざまな違いがあっても「このまちを訪れる人が快適に過ごせるように」という共通の思いを持って意見を出し合うことは、共生社会の実現に必要不可欠です。東京オリンピック・パラリンピックの延期によって、共生社会についてより深く学び・考え・実践する時間をもたらされました。このチャンスを活かし、市民のみならず企業や団体、行政が一丸となって、事前キャンプを素晴らしいものにしませう。

1年間の延期が繋いだ
 たくさんの人の支援の輪。
 それは、共生社会という
 未来を照らす、希望の灯。
 パラリンピックの先にある
 このまちの未来を
 信じて、進もう。



車いす体験講座を開催 ～東京パラリンピックに向けて～

車いすを使うスポーツ選手の車いすは、公共施設や病院などに置いているものと形や機能に大きな違いがあります。乗り方や扱い方、支え方を体験し、パラスポーツをより楽しく観戦しませんか。

- とき 2月20日(土) 13時30分～15時30分
- ところ 市総合体育館
- 講師 小林博光さん(総合せき損センター)
- 対象 地域活動やボランティア活動をしている人、活動を始めようと考えている人
- 申込期限 2月12日(金)
- 定員 先着30人 ※託児あり(先着5人)
- 参加費 無料
- 申し込み・問い合わせ 安全安心まちづくり課 ☎85-7113



▲昨年の講座の様子

【講座用車いす提供】
 総合せき損センター、(株)ヨシズカシステムプロダクト、田川市社会福祉協議会



ベラルーシ出身
 プリマーク・ナタリアさん

母国の選手を支えたい。
 その思いは変わりません。

日本に住んで、16年。東京パラリンピックで母国の選手たちを迎えられることを本当に嬉しく思います。選手たちが田川市で快適に練習し、大会で力を発揮できるよう、通訳のボランティアで力になりたいと願っています。コロナ禍で世の中が大きく変わってしまいましたが「母国の選手を支えたい」という思いは変わっていません。

トレーラーハウスを視察



ビクトリアさんとイリーナさん、城本会長が来訪。トイレの設備やエアコン・テレビのリモコンなどを細かくチェックし、ロシア語の表示が必要な部分について市に助言をしました。